

かめおかの土と焼き物を巡るおはなし

須恵器と小型三角窯の再現に挑んだ陶芸家と考古学者にプロジェクトの体験談を語っていただきました。



ゲスト／陶芸家
清水志郎さん
綿引恒平さん
明主 航さん
聞き手／考古学者
木立雅朗さん

日時／
2017年11月26日(日)
13:30-15:30
会場／
ギャラリーかめおか
1階 陶芸室

木立 はじめに、皆さんの自己紹介と、ここに至った経緯をご紹介いただけますか？

綿引 何か面白いことはないか、とギャラリーかめおかの方から相談を受けたときに、須恵器の面白い話があるよ、と話したのがきっかけでした。縁があって知り合った木立先生や大学の先輩の清水さん、後輩で亀岡で陶芸をしている明主くんを誘って、今日まで来ました。普段は篠町で「こどもアトリエでくてく」という教室をしているのと、「WATAKAMA/わたかま」という陶磁器ブランドで器をつくっています。

清水 普段は壺とか鉢とか食器とかを、

掘った土でつくるといっているのです、つねに土がほしいんです。なので、土が掘れるって聞いただけで、参加を決めたんですけど、こんな大変なことになるとは思っていませんでした。須恵器はつくったことはなかったんですが、やれば何とかできるんじゃないか、と。

明主 大学を出て独立して5年目になります。普段は時間経過によって生まれる美しさを、どう表現しようか、ということを考えて作品をつくっています。土を取ってつくる、ということにはしていませんが、今回の感覚を作品づくりに取り入れられるかもしれない、と考えて参加しました。

先人の凄さを痛感 —— 須恵器製作

木立 そもそも、綿引さんは、なぜ考古学の謎に挑もうと思われたんですか？ 相応に強い意志があった、と思いますか？

綿引 亀岡に来て10年くらいになるんですけど、4年前まで、篠に須恵器の窯跡がたくさんあって、それは有名なこと

だということを、全然知らなかったですね。地元の人や陶芸家に、亀岡にすごいところがあるんだよってことを話しても、知らない人が圧倒的に多かった。これは、何としても亀岡の人たちに知ってもらう機会にしたいな、と思いました。

木立 普段は電動ロクロや蹴ロクロで

つくっている皆さんが、私が、(当時は)須恵器は手回しロクロでつくっていますよ、といったことを真に受けて、作り方まで再現しようとされました。須恵器づくりを実際にやってみて、どうでしたか？

清水 自分の作品をつくるうえでは、どうにでもなるんですけど、須恵器を再現しなければならない、となると、途端に土選びがむずかしくなりました。掘ったときも、これでできると思ったんですが、挽きっぱなしでは薄くつくれなかった。土に砂が多く入っていたこともあるんですが、水簸をしても裂けてくる。ちがう場所の土を混ぜてみたんですが、工夫しても思ったようにはできなかったです。

明主 先人の方がつくった物の破片をみて、再現するむずかしさを痛感しました。できているようにみえても、割ってみると、あの薄さが再現できていない。それは、取ったところの土が悪かったのか、水簸をしていたのか、土に何かを混ぜていたのか、考えるとキリがないか…。でも、そこに面白さがあるな、と。

綿引 はじめは、簡単につくれるものと思っていたんですが、発掘された破片をみると、根元のほうがすごく薄くて。どうつくっていたのか、わからなくなるくら

い。途中から、粘土がちがうんじゃないか、という疑いを頭に入れながら、つくっているような感じでした。

木立 私からみると、すごく上手につくれているような気もしますが。須恵器をつくることは、意外とむずかしかったですか？

清水 相当、むずかしいです。須恵器は断面がこの薄さで、削ってないんですよ。昔の人は、これをポンポンつくってたってことなんですよ？

木立 いっぱい出てきますね。

清水 1個だけなら、必死になったら、できるかもしれないですけど、昔の道具で、ですよ？ さっき先生が、手回しロクロを使って偉いね、って褒めてくれたんですけど、僕らからしたら、「すいません、現代のベアリング付きの良い道具で」って感じなんですよ。電動ロクロで、市販の土で、ヘラコテ使って必死になれば、この薄さになるかもしれない。

綿引 いかに現代の道具に頼ってたか、って感じですよ(笑)。

清水 毎年やってたら、10年後くらいにはできてるかもしれないですね。

木立 まあ、須恵器の歴史からすると、10年なんて、一瞬ですね(笑)。

